

防災力を高めるための防災教育に関する研究 —その3 幼児自らが学ぶことのできる 早期防災教育に役立つ教材開発(2)—

正会員 ○ 入澤 美樹*1
正会員 石川 孝重*2
正会員 伊村 則子*3

防災教育 幼児 絵本
教材 自助 家庭

§ 1 はじめに

世界有数の地震国である我が国では、今までに地震により多くの犠牲者を出している。1995 年の阪神・淡路大震災や 2004 年の新潟県中越地震も記憶に新しい。そして東南海・南海地震の発生が危惧されている現在、いまだ日本の防災教育は十分とはいえない状況にある。そこで本報では、幼児(3~5 歳)が自ら学べる教材である絵本に着目し教育絵本の現状を把握した上で防災教育の絵本を制作し、早期防災教育に役立つ教材を開発することを目的とする。

§ 2 幼稚園の防災教育の現状

幼稚園教諭が考える幼児期に必要な知識で、『知っておく・学ぶ必要性のあるもの』として地震と火事が 100% となっている。¹⁾また、東京の幼稚園 17 箇所避難訓練の年間回数とその内容について比較したものをみると、毎月行っている所もあれば年に 1 回しか行わない所もある。¹⁾またその内容も、火災想定訓練しか行わない所もあれば、地震・火災以外にも園バス火災など細かな場面想定を行う所など、幼稚園によって訓練内容や頻度が様々であることがわかった。つまり、幼児に地震や火事などの防災訓練が必要と考えていても、実際に行われている防災教育は各幼稚園によってばらつきがあり、不十分な部分があるのではないかと考えた。

§ 3 教育絵本の現状

幼稚園での防災教育の現状は明らかになったが、それでは家庭での学習はどうなっているのだろうか。家庭での幼児の学習手段である絵本について調査することにした。幼児が地震について学べる絵本教材がどの程度出版されているのかを知るために、絵本の出版社 48 社が加盟する日本児童図書出版協会のサイト“子どもの本 on the web”²⁾において児童書の総数とそのうちの幼児向け教育絵本の冊数を調べた。結果を図 1 に示す。このサイトにおいて紹介される児童書は全部で 27,591 冊であり、そのうち幼児向け絵本は 5,618 冊であった。また、教育絵本に的を絞って考えるために、本サイトの利用者からリクエストのあった 29 テーマごとに本を紹介しているコーナーの冊数を調べた。ここでは 1,121 冊が紹介されているが、そのうち教育的 content ととらえられる「いのちについて考える本」「人権について考える本」「たのしいマナーの本」の 3 テーマに分類される絵本は 125 冊であり、う

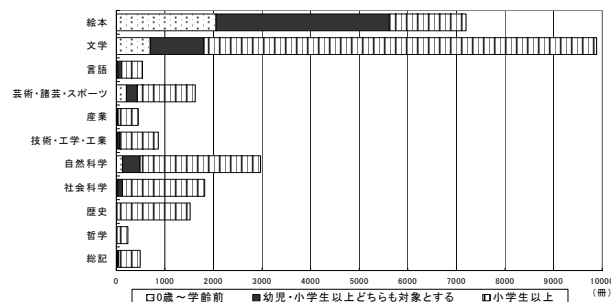


図1 児童書のジャンルと対象読者による分類

ち幼児向けの絵本はわずか 27 冊であった。これにより、児童書の中でも幼児向けの絵本はかなりの数が出版されているが、教育絵本となると数十冊にとどまっていることが明らかになった。

次に地震に関する絵本の普及度合いを知るために、国立の児童書専門の図書館である「国際子ども図書館」にて地震に関する内容の絵本を検索した。この図書館には 176,729 冊の図書が収蔵されているが(平成 16 年 10 月現在)、地震に関する内容の絵本はわずか 5 冊だけであり、さらに幼児向けとなるとわずか 3 冊にとどまった。これらの結果より、幼児が地震について学べる絵本が少ないことがわかった。

§ 4 絵本の制作

絵本の制作にあたり、まず幼児に教えるべき内容項目の検討から行った。“人と防災未来センターキッズページ”³⁾では、地震が起きた時の対処として「①まず身を守る②もし火がついていたら火を消す③窓や戸を開けておく④慌てて外に飛び出さない」という 4 点を学習テーマとしてあげていた。このページは小学生向けに作られているが、本研究では幼児(3~5 歳)を対象とするため、「②の消火」や「③の出入り口の確保」は幼児の身がかえって危険になる恐れがあると考え、今回制作の内容からは省くことにした。これにより、制作する絵本は、地震災害の危険を知ることにより自分の身を守る方法を学ぶ、ということに主眼を置くことにした。さらに、対象年齢を考慮し文字の量は少なく絵から学べるようにすること、一方では表現により幼児に恐怖心を抱かせることのない様に工夫することにした。これにより制作する絵本の学習内容は、「①机の下にもぐる②倒れやすい家具から離れる③窓ガラスに近寄らない④慌てて外に飛び出さ

Study on Education for Disaster Prevention to Improve People's Ability to Cope with Earthquake Disaster

—Part 3 Useful Material of Early Childhood Education for Disaster Prevention which Infants Learn by themselves (2)—

IRISAWA Miki, ISHIKAWA Takashige and IMURA Noriko

ない⑤商品棚に近寄らない⑥避難の際エレベーターを使わない⑦ブロック塀に近寄らない⑧崖や川べりに近寄らない⑨電柱・電線から離れる⑩津波の危険から逃げる」と各項目を1ページごとに構成することにした。さらに実際の読まれ方としては親が子に読み聞かせをすることが多いと想定し、学習ポイントを明確に伝えるために巻末には保護者向け解説ページを設けた。

次に、制作した絵本を指導教員や研究室の学生、また一般的な意見として親や友人などに読んでもらい修正を加えた。主な変更点は、全ページにおいて幼児にとってほしい正しい行動と、誤った行動を取る2匹のキャラクターによって構成することと(図2)、「⑩津波の危険から逃げる」の項目では避難先を文字だけでなく絵で表現する(図3)などである。

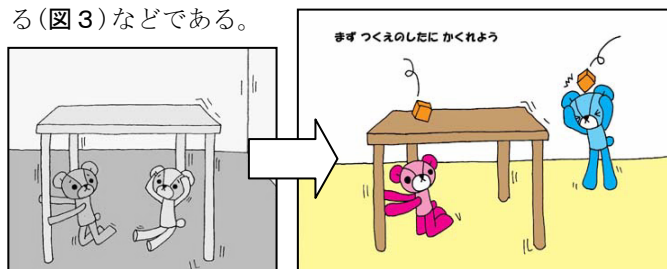


図2 表現改定例(正解と不正解の明示)

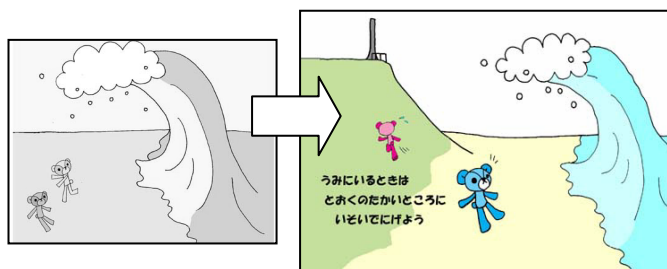


図3 表現改定例(避難先の明示)

§5 ヒヤリング調査と絵本の修正

次に、修正を加えた絵本を対象である幼児や絵本を選び読み聞かせをする親に見せ、学習内容が伝わるか、興味を持たせられるかなど、絵本に対する評価をしてもらうために、実際に親子で読んでもらい対話形式のアンケートを行った。質問内容は、子どもに教えた防災知識と、制作した絵本の評価である。制作した絵本の対象年齢は3～5歳と想定しているため、調査は2004年12月に2～6歳の子どもとその保護者50組(うち3人は親子ではなく親のみ)に行い、回答者の年齢構成を図4に示す。また、アンケートの結果のうち、幼児に教えた項目の結果を図5に、親が感じる子どもの理解度を図6に示す。

図5に示すように、過半数を超える回答を得た項目は、すべて制作した絵本の内容に含んでいることがわかる。また『出口の確保』については全体で38%(19人)と過半数以下ではあるが、5歳児を持つ親には比較的多く回答を得ていたため、今回新たに項目を追加することにした。

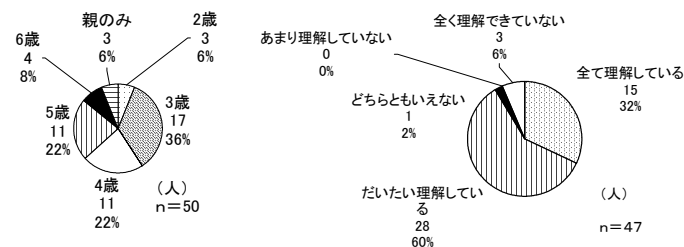


図4 年齢別にみた調査対象

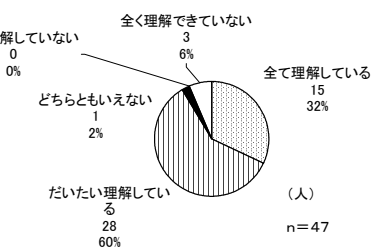


図6 親が感じる子供の理解度

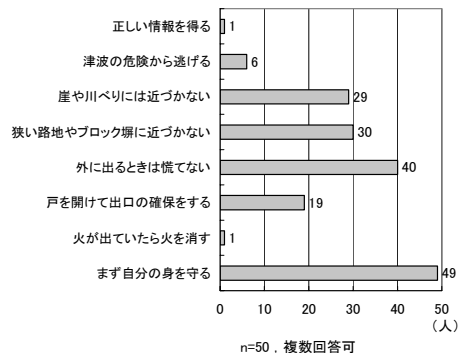


図5 親が考える子どもに教えた防災知識

また、親が感じる制作絵本の子どもの理解度では、『全て理解している』『だいたい理解している』を合わせて90%以上(43人)の回答を得ているので、表現方法に問題はないと考えられる。しかし、正解のクマを赤、不正解のクマを青と全てのページで統一していたが、青と赤を男女と認識してしまい、誰にでも平等に起こりうる災害をテーマにしたものとしてはふさわしくないのではないかと、という意見があったため、登場キャラクターに緑と黄色を追加することにした。

§6 まとめ

先日の新潟県中越地震が記憶に新しく、人々の防災意識は高まっていて、親の立場としても幼児に防災について教えたと思っていることがわかった。しかし実際に子どもに教えるのは難しく、このような絵本が家庭にあったら良い、というコメントも得られた。今回のアンケートでは津波に対する警戒意識の低さが目立ったが、2004年のスマトラ沖地震での惨事を考慮すると、幼児期から防災について学ぶ教材の需要はますます高まるのではないかと考えられる。

ヒヤリング・アンケート調査にご協力戴いた方々に感謝する。

【引用文献】

- 1) 飯泉知花、久木章江：幼児期の防災教育のあり方と教材の作成，日本建築学会大会学術講演梗概集(E-2 分冊)，pp.739～740，2004年8月。
- 2) 日本児童図書出版協会：子どもの本 on the web，<http://www.kodomo.gr.jp/>，2004年5月31日。
- 3) 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター：人と防災未来センター キッズページ，<http://www.dri.ne.jp/html/kids/index.html>，2004年9月。

*1 茅ヶ崎市役所

*2 日本女子大学住居学科 教授・工学博士

*3 武蔵野大学環境学科 講師・博士(学術)

*1 Chigasaki City

*2 Prof., Dept. of Housing and Architecture, Japan Women's Univ., Dr. Eng.

*3 Lecturer, Dept. of Environmental Sciences, Musashino Univ., Ph. D.